

ヨセフの神

創世記50章1～26節

「今さらに石に布団も着せられず」「孝行をした
い時に親はなし」

1～3節

その人が自分にとってなくてはならない大切な存在であったということは、その人を失った時に初めてわかるものかも知れません。親も同じです。多くの人々は父母を失った時に、その生前中に、何も親孝行をしなかったことを悔やむのです。

しかし、ヨセフは違いました。彼は父親が生きて
いる間、あらゆる限り最善を尽くしました。それ
でもなお父が世を去った時、

1節「ヨセフは父の顔の上に崩れ落ちて、父のそばで
泣き、父に別れの口づけをした。」のでした。

——— 父ヤコブをミイラ

にした ———

でも、いつまでも泣いていてもいられません。次
の行動に移りました。

2節「ヨセフは自分のしもべである医者たちに、父
をミイラにするように命じたので、医者たちはイス
ラエルをミイラにした。」当時エジプト人は死体の
内臓を取り除いて薬を加えてミイラにする習慣があ
りました。ヨセフもそのエジプトの習慣に倣って、
父の死体をミイラにしました。その理由は、後日
（ごじつ）父の遺体をカナンの地に運んで、約束の
地に埋葬するためでもありました。（3節、読む）と

ころがヨセフはミイラを「自分のしもべである医者たちに」だけ任せました。実はエジプトにはミイラ造りの専門家がいたのですが、ヨセフは彼らを用いませんでした。その理由は、エジプトに昔からまつわりつく宗教儀式や呪術的な習わしを避けるためであったと思われます。特に死者礼拝に深く結びついたミイラ化を、信頼できる「医者たちに」よって、全く宗教的な色彩のない目的だけで行ったのです。

この彼のこだわりを知る時にここにエジプトという異教社会の中であって、真の神を信じて毅然とした生き続けたヨセフの信仰の良心をみるのです。

———— 葬儀の場所

さて、エジプト人はヤコブの死を悲しんで70日間の喪に服しました。そしてヨセフはファラオの許可を得て、（6～8節、読む）いよいよカナンの地へと向かうのでした（9節、読む）。この時ヤコブの一行は地中海沿岸の「ペリシテ人の地の道」を進んだと思われます。直進してガザの辺りまで行き、そこで右折してヘブロンに向かいます。

その一団にはエジプトの長老や戦車、騎兵隊まで出動しています。一行を守る軍隊、必要物資を運ぶ車もあったと思われます。「ヨルダンの川向こう」この国境まで来て、ヤコブの葬送に協力していたエジプト人の行列は、任務を解かれて帰って行きました。こうして、いよいよイスラエルの地に入りました。

「ヨルダンの川向こう」この場所はエジプト川を越えたところではないでしょうか。葬儀を行った所はガザの辺りかも知れません。（10～12節、読む）

———— 盛大なヤコブの

葬儀 ———

さて、ヨセフはすべての事をファラオの同意を得て行いました。ところがヨセフが父の葬儀のためカナンの地に向かおうとした時、ファラオはヨセフを失うのではないか、もう帰って来ないのではないかと心配をしたようです。そんな王様の心中をヨセフは察しました。ヨセフはそんなファラオに語りかけました。5 b 節「私はまた帰って参ります。」このことばかりも、どんな時でも、目の前の人間関係を大切にしている、ヨセフのやさしい人柄が伝わってきます。私たちも、これからの人生、どんな時でも、あらゆる人間関係を大切にしていきたいですね。

———— 盛大な葬儀、ヤコブをヘブロンの地に葬る ————

(10、11節、読む) ヤコブの葬式は、まさにエジプト帝国の国葬と言っても良い位でした。この様にしてヨセフは自ら、愛する父ヤコブの葬儀を盛大に行いました。そして、その後

(13a節)「息子たちは彼をカナンの地に運び、マクペラの畑地の洞穴に葬った。」のでした。

実はその地はヤコブが生前中に子供たちに命じていたことでした。(49：29～32節、読む) そして、

(50：12節)「ヤコブの息子たちは、父が命じたとおりに父に行った。」のでした。こうして、一行全員は、すべて葬儀に関することをすべて終えてエジプトに戻りました。

———— 復讐を恐れていた兄弟たち ————

ところが、葬儀が無事に終わった後、問題が起きました。

15～21節、(15節、読む) さて、盛大な葬儀を目の当たりにして、ヨセフの兄たちは改めて、ヨセフの権勢の大きさを知りました。そして、彼を恐れまし

た。そこで、父親のヤコブの葬式の後で、もしかするとヨセフが自分たちに対して復讐をするのではないかと心配をし始めました。（いままでは、父親が生きていたので大丈夫だと思っていたようです）

神学者カルバンは言いました。「良心の呵責は、生きながらの地獄である。」

彼らは、今の今まで苦しんでいたのです。なんと、エジプトでヨセフと出会ってから17年間もです。良心の呵責で苦しみ、更に復讐を恐れていたのです。そこで、彼らはヨセフに第三者を通して、思い切って話しかけました。

———— ヨセフは泣いた

————
（16～18節、読む）17節「ヨセフは彼らのこのことばを聞いて泣いた。」この時ヨセフは泣きました。ヨセフは何故泣いたのでしょうか？ 実はヨセフの方ではとっくの昔に兄たちの罪を許していました。それにもかかわらず兄たちは許されているとは思っていませんでした。この様に兄たちから信じられていないということが分かった時ヨセフは本当にやり切れない寂しい思いに満たされました。兄たちは、今までいくらヨセフの「あなたたちの罪は許します」とのことばを聞いていたとしても、やはり心の深い所では、信じていなかったのです。父ヤコブが生きていた時は、父の存在によって守られていたにしても、父が他界してしまった今、自分たちの命は保証されてはいないと思うようになりました。そこで兄たちは（そんなに意図的ではないと思いますが）父ヤコブの生前中に語ったことばを持ち出して、ヨセフに伝えました。（17節、読む）兄たちは父ヤコブのことばにより頼みました。確かに互いの和解のためには仲介者が必要なのでしょう。彼らにとってそれは父ヤコブでした。そんな兄たちの心の

不安をあらためて知ったヨセフは、答えました。

——— ヨセフの本

心 ———

（19～21節、読む）「ヨセフは言った『恐れることはありません。・・・もう恐れることはありません。私は、あなた方もあなた方の子供たちも養いましょう。』このように、ヨセフは彼らを安心させ、優しく語りかけた。」実は、繰り返しますがヨセフの方では、とっくの昔に、彼らの罪を残らず許していたのでした。

それだけではありません。更に「・・・どうして、私が神の代わりになることができるでしょうか（いや出来ません）確かにあなた方は私に悪を謀（は）かりましたが、神はそれを、良いことのための計らいとしてくださいました。それは今日のように、多くの人が生かされるためだったのです。・・・」昔の兄たちのことをヨセフは許しているだけでなく、すべてのことを神の御業として受け入れて神様に感謝しています。

それにしても、もしもです。ヨセフが、ずーと父から離れないで、父のもとにいたならば、彼は幸せであったかも知れませんが、あの飢饉の時に、家族を救うことは出来なかったでしょう。そう考えると、すべては神様のご計画の中であって、兄たちがしたことも神の業でした。兄たちも神様に動かされて行動したのです。ですから仕返しなどとは考えも及ばないことでした。

誰でも、神様と出会って、神様の考えておられることを知って、神様から自分に期待されている使命を知った人は、人を喜んで許して生きることが出来

ます。素晴らしいことです。

——— ヨセフの遺言

———
(22～26節、読む) 神様のみこころを知ると、自分に与えられた使命を悟り、それにたいする備えができるようになります。(例えば、あの大学に行こう、あの先生から学ぼう、あの本を読もう、あの国へ行こう、あの国の言葉を覚えよう、等々・・・) ヨセフは知って確信しました。自分の使命はイスラエルを飢饉から救う事、更に神様が再びイスラエルの民をカナン之地に導き上げられることの業を行う事。そしてその時には、自分の遺体も又、父ヤコブと同じように、イスラエルの民が、このエジプトの地を出る時、皆と一緒にイスラエルに上る。24節「兄弟たち」といって、(25節、読む) ヨセフは兄弟たちに頼みました。イスラエルの民が、将来いつか時が来て、エジプトを脱出する時に一緒に自分の遺体をカナン之地まで運んでくれるように遺言しました。そして、いよいよストーリーは出エジプトに入るのです。

——— エジプトは寄留の地で

した ———

26節「ヨセフは百十歳で死んだ。彼らはヨセフをエジプトでミイラにし、棺(ひつぎ) に納めた。そして、それからずうーとあとになってから、やがてそのことは実行されました。

出エジプト13：19節「モーセはヨセフの遺骸を携えていた。それはヨセフが『神は必ずあなたがたを顧みてくださる。そのとき、あなたがたは私の遺骸をここから携え上らなければならない』と言って、イスラエルの子らに堅く誓わせていたからである。」

確かにヨセフはエジプトで成功しました。しか

し、ヨセフにとってエジプトはあくまでも寄留の地でした。彼の目は常にカナンの地に向けられていました。そしてそれが300年以上も後にやがて実現することになるのです。ヨセフは300年以上も後に、カナンの地を目指して、エジプトから離れることが出来ました。ヨセフの兄弟たち、その子供たちが、ヨセフの遺言を守りました。

——— 父と子が同じところに

そして、もう一つ、更にその後の出来事です。
ヨシュア24：32節「イスラエルの子らがエジプトから携え上ったヨセフの遺骸は、シェケムの地、すなわち、ヤコブが百ヶシタでシェケムの父ハモルの人たちから買い取った野の一面に葬った。・・・」
今、ヨセフはカナンの地に埋められました。この地は、父ヤコブが用意してくれた場所でした。このカナンの地は、何を象徴しているのでしょうか。それは約束の地、更に天の御国です。父と子が共に生きる、お墓の向こうにある御国なのです。

詩篇116篇15節「主の聖徒たちの死は、主の目に尊（たつと）い。」

最後に、御国を目指し、地上においては、神様の使命に生きたジョン・ウエスレー牧師を紹介しましょう。

——— 人生、すべて予定通り

メソジスト教会の創設者ジョン・ウエスレー牧師（1703～91歳）が、ある人から次のような質問を受けました。「あなたがもし明晩12時に死ぬものと決まったら、どんな用意をなさいますか？」

ウエスレー牧師は答えました。「やはり、その一日は、予定通りに過ごすだけです。今朝と明朝はゴウセスターに行き、そこで説教をします。それから馬でチウクスバクに行き、午後説教をし、夜は信者と会い、マルチン君の家に泊まり、その家族と話したあと、神様に祈りを捧げます。そして10時に寢床に入って、翌朝は栄光の国で目覚めるだけです。」

その通りに、ウエスレー先生は10時に眠りにつく時、ひざまずいて祈っていましたがその時、彼は天に引き上げられて行きました。

詩篇84篇12節 「万軍の主よ 何と幸いなことでしょう。あなたに信頼する人は。」